



Title	ヴェーダの規範に従う「善人」の輪廻について：マドゥスーダナの著作『隠された意味の顕照』に見られる事例から
Author(s)	眞鍋，智裕
Citation	北海道大学文学研究院紀要，173，1（左）-24（左）
Issue Date	2024-07-26
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.173.11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92856
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_173_Manabe.pdf



ヴェーダの規範に従う「善人」の輪廻について¹ —— マドゥスーダナの著作『隠された意味の顕照』に 見られる事例から ——

眞 鍋 智 裕

1. 序

古代インドにおいて輪廻転生 (saṃsāra) とそれからの解脱 (mokṣa) という考え方が登場して以来、ヴァルナやアーシュラマに応じて規定されている規範 (dharma) という、いわば世間的 (laukika) には善い行いを遂行している者たちは、善人ではあるけれども、それだけでは輪廻世界から解脱することはできないと考えられるようになった。輪廻世界から解脱するためには、諸学派間において行為 (karman)² を必須なものに見做すか (jñānakarmasamuccaya)、あるいは行為を直接的には不要なものに見做すか (naiṣkarmya) という見解の相違はあるものの、真実の知の獲得が必要とされる。

アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派 (Advaita Vedānta, 以後アドヴァイタ学派と表記) の学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī, ca. 16th-17thCE, 以後マドゥスーダナと表記) は、解脱のために

¹ 本稿は、京都大学人文科学研究所共同研究班 (一般 A 班) 「インドにおける「循環的存在論」の形成 —— 祭祀思想から哲学への発展を中心に」(研究班長: 手嶋英貴龍谷大学教授) 第 20 回研究会における同題目の研究報告を元に、加筆・修正を加えたものである。研究会での報告に際して、貴重なご意見を賜った研究会参加者の方々にこの場で謝意を表す。

² バラモン教・ヒンドゥー教文献においては、行為のなかでも特に議論的となるのは、ヴェーダ聖典に規定されている祭式行為の必要性の有無である。

は直接的には行為を不要なものに見做すアドヴァイタ学派の見解に立脚しながらも、念想 (upāsana) や主の規範 (bhāgavatadharma) という行為の遂行を手段とする最高神 (parameśvara, 主宰神 īśvara) に対するバクティ (bhakti, 信愛) によって解脱に至ることができることを主張した³。この念想や主の規範の遂行に際して重要なことは、第一に、行為の果報の獲得を願わず、それを放棄することである。そしてその結果、心が浄化 (cittaśuddhi, or buddhiśuddhi) されるとマドゥスーダナは述べる⁴。また第二に重要なことは、不二な存在であり最高の真実である最高神を正しく知ることである。輪廻世界からの解脱の直接的な原因は、この最高神に対する正しい知であり、果報の放棄を伴った、念想や主の規範の遂行による心の浄化は、この知を獲得するための手段である⁵。

マドゥスーダナは、聖典 *Bhagavadgītā* (以下 BhG と略記) に対する彼の註釈『隠された意味の顕照』(*Gūḍhārthadīpikā*, 以下 GAD と略記) において、以上のような最高神に対するバクティによる輪廻世界からの解脱の方法を論じる一方で、悪人ではないけれども、ヴェーダ的な規範を遂行している、いわば世間的な善人が輪廻世界から逃れられないことも論じている。結論からすると、彼らが解脱を獲得できないのは、上記の二つの要素を欠いているからであるが、本稿では、マドゥスーダナが GAD において、彼ら世間的には善人とされる者たちが輪廻世界から逃れられないことをどのように描写しているのか、その具体例を一、二例紹介したい⁶。

³ Saha [2019], Manabe [2024] 参照。

⁴ これは、ヴェーダに規定された祭式のうち、定期祭・臨時祭 (nityanaimittikakarma) の遂行によって心が浄化されるというミーマンサー学派とヴェーダーンタ学派の理論を、手段としてのバクティ (sādhana-bhakti) の遂行にも適用したものと考えられる。ミーマンサー学派とヴェーダーンタ学派において定期祭・臨時祭の遂行によって心が浄化されるという点については眞鍋 [2024] を参照。

⁵ Manabe [2024] 参照。

⁶ GAD の和訳に際して、先行訳である Gupta [1977] と Gambhirananda [1998] とを参考にした。また、GAD に対する先行研究として Saha [2014] を適宜参照した。

2. 三ヴェーダを知り、祭式行為を遂行する者たちの輪廻

2.1. 最高神クリシュナ以外の神格を願望祭によって祀る者たちは輪廻する

マドゥスーダナは、BhG 9.14-15 に対する GAD において、最高神に対して、ヴェーダーンタ文の聴聞・思惟・熟想（śravaṇamanananididhyāsana）というあり方で奉仕する者たち⁷、またそれが不可能ではあるが、最高神を唯一者として・個別なものとして・多様なものとして念想する者たち⁸について論じている。その後、BhG 9.20-21 に対する GAD において、マドゥスーダナは、『リグ・ヴェーダ』・『ヤジュル・ヴェーダ』・『サーマ・ヴェーダ』という三ヴェーダを知り、祭式行為を遂行することで罪悪が浄められてはいるけれども欲望を持つ者たちは、常に輪廻における苦を経験する、ということを論じている。

先ず、BhG 9.20 に対する GAD においては、彼らが天界に至り、そこで神的な享樂を得ることが詳しく論じられる。

GAD 710,3-22 (on BhG 9.20):

traividyaṁ mām somapāḥ pūtapāpā yajñair iṣṭvā svargatiṁ prārthayante /
te puṇyam āsādy surendralokam aśnanti divyān divi devabhogān
// 20 //

… yājñikā **yajñair** agniṣṭomādibhiḥ krameṇa savanatrāye vasurudrādityarūpiṇaṁ **mām** īśvaram **iṣṭvā** tadrūpeṇa mām ajānanto 'pi vastuvṛttena pūjayitvābhiṣṭya hutvā ca somaṁ pibantīti **somapāḥ** santas tenaiva somapānena **pūtapāpā** nirastasvargabhogapratibandhakapāpāḥ sakāmatayā **svargatiṁ prārthayante** na tu sattvaśuddhijñānotpattyaḍi.

⁷ BhG 9.14 に対する GAD 参照。

⁸ BhG 9.15 に対する GAD 参照。

三ヴェーダを知り⁹、諸祭祀によって私を祀ってから、ソーマを飲み、罪悪が浄められた者たちは、天界に行くことを望む。彼らは、天において幸いな神々の王の世界に至り、神的な神々の諸の享樂を味わう。…… [三ヴェーダを知る] 祀る者たちは、諸祭祀によって、すなわちアグニ・シュトーマ [祭] 等によって、順に三つの時間帯（朝、昼、夕）において、ヴァス [神群]・ルドラ [神群]・アーディティヤ [神群]¹⁰を姿とする私を、すなわち主宰神を彼らの姿で祀ってから、すなわち実際には (vastuvṛttena) 私を知らないとしても、供養し、[ソーマを] 搾って、[供物を] 捧げてから、[同じその] ソーマを飲むという意味でソーマを飲む者たちであり、同じそのソーマを飲むことによって罪悪が浄められた者たち、すなわち天界の享受を妨害する罪悪が取り除かれた者たちは、欲望を持つので、天界に行くことを望むのであって、純質（心）の浄化と知の生起などを [望むのでは] ない。

ここでは先ず、三ヴェーダを知る者たちは、アグニ・シュトーマ祭等によって、ヴァス神群・ルドラ神群・アーディティヤ神群の姿を取っている最高神

⁹ “traividyaḥ”に関してマドゥスーダナは以下のように解釈している。GAD 710,17-19 (on BhG 9.20): ṛgvedayajurvedasāmavedalakṣaṇā hautrādhvaryavaudgātrapratipattihetavaḥ tisro vidyā yeṣāṃ te trividya eva svārthikataddhiteṇa **traividyaḥ** tisro vidyā vidantīti vā vedatrayavidā ... (その者たちに『リグ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『サーマ・ヴェーダ』を特徴とし、ホトリ祭官に関しての (hautra)・アドゥヴァリユ祭官に関しての (ādhvaryava)・ウドガートリ祭官に関しての (audgātra) 理解 (pratipatti) の原因である三つの知識がある、そのような者たちが三つの知識を持つ者たち (trividyaḥ) に他ならず、自身を対象として持つ [という意味の] タッディタ [接辞] によって、三つの知識を持つ者 (traividyaḥ) [という語形となる]。あるいは、[traividyaḥ とは] 三つの知識を知るという意味で三ヴェーダを知る者たち (vedatrayavidāḥ) のことである……)。

¹⁰ Macdonell [1897: 130] に、ヴァス神群、ルドラ神群、アーディティヤ神群がそれぞれ地・風（虚空界）・天界を代表することが指摘されている。この GAD のヴァス神群・ルドラ神群・アーディティヤ神群の併記も、地・空・天という三界の神々を代表したものと考えてよいであろう。

クリシュナに対して、供養し、ソーマを搾り、そしてそれを捧げるという形で祀ってから、そのソーマを飲むことによって罪悪が浄められる、ということが述べられている。しかも彼らは、供養対象であるヴァス神群・ルドラ神群・アーディティヤ神群が実際には最高神クリシュナであることを知らない。そのため、この三ヴェーダを知る者たちとは、最高神クリシュナの信仰者たちではなく、ヴェーダの規定通りにアグニ・シュトーマ祭等を行っている、一般的な、世間的なブラーフマナたちのことである。

ここではアグニ・シュトーマ祭は天界への到達を目的とする願望祭として扱われており¹¹、それを行っている彼ら三ヴェーダを知る者たちは、天界の享受という欲望を持つ者たちであるので、以上のような諸祭祀によって天界への到達を望むのであって、解脱のための手段となる心の浄化と真実知の生起は望まない、というのである。そのためマドゥスーダナは、「罪悪が浄められる」ということも、「天界の享受を妨害する罪悪が取り除かれる」ことであると解釈している。

天界への到達を望む彼らは、望み通り天界においてインドラのもとに至り、人間には得られない、神の身体のみによって得られる諸享樂を味わう¹²。し

¹¹ マドゥスーダナは、BhG 9.20 を、願望祭を遂行するものたちに言及したものと理解しており、そのため BhG 9.20 の「諸祭祀」を願望祭としてのアグニ・シュトーマ祭等のことであると解釈したのであろう。GAD 710,15-17 (on BhG 9.20): ye tu sakāmāḥ santo na kenāpi prakāreṇa bhagavantam upāsate kiṃ tu svasvakāmasādhanāni kāmāny eva karmāny anutiṣṭhanti te sattvaśodhakābhāvena jñānasādhanam anadhirūḍhāḥ punaḥ punar janmamaraṇaprabandhena sarvadā saṃsāraduḥkham evānubhavanti āha dvābhyām (一方、欲望を持つ者たちであって、如何なるあり方によっても主を念想せず、むしろそれぞれ自身の欲望の手段である他ならぬ諸願望祭を遂行する者たちは、純質(心)が浄化することがないので、知の手段に登らないで何度も何度も生死が連結することによって、常に輪廻における苦みを経験する、ということ)を [BhG 9.20-21 という] 二 [頌] によって述べる)。なお、ある祭式を願望祭とするか、定期祭・臨時祭とするか、という点に関しては、Yoshimizu [2022] を参照。

¹² GAD 710,22-23 (on BhG 9.20): **te divi svarge loke puṇyaṃ puṇyaphalaṃ sarvotrīṣṭaṃ surendralokaṃ śatakratoḥ sthānam āsādy divyān manuṣyair alabhyān devabhogān devadehopabhogyān kāmān aśnanti bhuñjate** (彼らは天において、すなわち天界において、幸いな、すなわち福德の果報であり、全てのもののうちで最上の神々の王の世界、

かし彼らは、諸祭祀によって積まれた福德が尽きた後には、再び人間世界に戻って来るのである。BhG 9.21 と当該箇所に対する GAD においては、彼らが福德の尽きた後に天界から人間世界に再び戻って来ること、また天界における享楽という欲望を持つ者たちは、三ヴェーダに教示された規範に従いながらも、天界と人間世界との往來を何度も繰り返すことが述べられる¹³。

すなわちインドラ (śatakratu) の土地に至り、神的な、すなわち人間たちによっては得られない神々の諸の享楽、すなわち神の身体によって享受され得る諸の欲望を味わう、すなわち享受する)。

¹³ GAD 712,15-21 (on BhG 9.21): tataḥ kim aniṣṭam iti tad āha — te taṃ bhuktṛvā svargalokaṃ viśālaṃ kṣiṇe puṇye martyalokaṃ viśanti / evaṃ hi traidharmyam anuprapannā gatāgataṃ kāmakāmā labhante // 21 // **te sakāmās taṃ** kāmvena puṇyena prāptaṃ **viśālaṃ** vistīrṇaṃ **svargalokaṃ bhuktṛvā** tadbhogajanake **puṇye kṣiṇe** sati taddehanāśāt punar dehagrahaṇāya **martyalokaṃ viśanti** punar garbhavāsādiyātānā anubhavantīty arthaḥ. punaḥ punar **evam** uktaprakāreṇa. **hi** prasiddhyarthaḥ. **traidharmyam** hautrādhvaryavaudgātrādharmatrayārhaṃ jyotiṣṭomādikaṃ kāmyaṃ karma. **trayīdharmam** iti pāṭhe 'pi trayā vedatrayeṇa pratipāditaṃ dharmam iti sa evārthaḥ. **anuprapannā** anādaу saṃsāre pūrvapratipattyapekṣayānuśabdaḥ. pūrvapratipattyanantaraṃ manuṣyalokaṃ āgatya punaḥ pratipannāḥ. **kāmakāmā** divyān bhogān kāmayaṃānā evaṃ **gatāgataṃ labhante**. karma kṛtvā svargaṃ yānti tata āgatya punaḥ karma kurvantīty evaṃ garbhavāsādiyātānāpravāhas teṣāṃ aniṣam anuvartata ity abhiprāyaḥ (それから、どのような望まれないことがあるのか、ということ述べる。—— 彼らは、その広大な天界を享受してから、福德が減す時、可減の世界に入る。実にこのように、三つの規範からなるものに従い、享楽を願う者たちは行ったり来たりを得る。—— 彼ら、すなわち欲望を持つ者たちは、その望ましい福德によって獲得された、広大な、すなわち広い天界を享受してから、その(天界の)享受を生じさせる福德が減す時、その身体が消滅するので、再び身体を得るために、可減の世界に入る、すなわち再び託胎等という諸の苦悩を経験する、という意味である。何度も何度もこのように、すなわち上述のあり方で、ということである。実に、とは周知の意味である。三つの規範からなるものとは、ホートリ祭官に関する・アドヴァリユ祭官に関する・ウドガートリ祭官に関するという三つの規範に相応した、ジョーティ・シュトーマ[祭]等という願望祭である。三つからなる規範という読みの場合でも、三つからなるもの、すなわち三ヴェーダによって教示された規範という、同じ以上のことが意味である。従った、すなわち無始の輪廻において、以前の[生の]獲得を必要とするので「～に従う」(anu)という語がある。以前の[生の]到達の直後に人間世界に戻って来たら、さらに[生を]獲得した、ということである。享楽を願う者たち、すなわち神的な諸の享受を願っている者たちは、以上のように行ったり来たりを得る。祭式行為を為してから、天界に行き、そ

2.2. クリシュナ以外の神格を祀る者たちには最高神に対する真実の知がない

ところで、BhG 9.20 に対する GAD において、最高神クリシュナがヴァース神群・ルドラ神群・アーディティヤ神群の姿を取ると述べられていた。BhG 第9章においては、この直前の BhG 9.16-19 において、最高神クリシュナが天啓祭や祖霊祭を初めとして、全ての事物の姿を取ることが述べられている¹⁴。またマドゥスーダナは、BhG 9.22 に対する GAD おいては、欲望を持たず、クリシュナを主ヴァースデーヴァであり、全てのものを本質とする等と正しく知る者たちは、為すべきことを為した者たちに他ならないと述べる¹⁵。そこでマドゥスーダナは、以下のような問いを提起する。

れから戻ってきて、さらに祭式行為を為す、とこのように託胎等という苦痛の連続が彼らに絶え間なく続いていく、という趣意である)。

¹⁴ BhG 9.16-19: ahaṁ kratuṛ ahaṁ yajñaḥ svadhāham ahaṁ auśadham / mantra 'ham ahaṁ evājyam ahaṁ agnir ahaṁ hutam // 16 // pitāham asya jagato mātā dhātā pitāmahaḥ / vedyam pavitrām oṃkāra ṛk sāma yajur eva ca // 17 // gatir bhartā prabhuḥ sākṣī nivāsaḥ śaraṇam suhṛt / prabhavaḥ pralayaḥ sthānam nidhānam bijam avyayam // 18 // tapāmy ahaṁ ahaṁ varṣam nigrhṇāmy utsrjāmi ca / amṛtam caiva mṛtyuś ca sad asac cāham arjuna // 19 // (私は [天啓] 祭式であり、私は [伝承] 祭式であり、私はスヴァダー (祖霊祭) であり、私はアウシャダであり、私はマントラであり、私はアージュヤであり、私は祭火であり、私は献供である。私こそがこの世界の父であり、母であり、設置者であり、祖父である。知られるべきものであり、浄化具であり、オーム音であり、讃歌、歌詠、また祭詞である。[私は] 帰趨であり、支持者であり、支配者であり、目撃者であり、住居であり、避難所であり、友人であり、産出であり、帰滅であり、持続であり、貯蔵所であり、不変の種子である。私は熱し、私は雨を止めて、そして [雨を] 降らせる。私は死ではないものであり、死であり、有であり、非有である。アルジュナよ)。

¹⁵ GAD 714,3-6 (on BhG 9.22): **anyo** bhedadr̥ṣṭivīṣayo na vidyate yaśaṁ te '**nanyāḥ** sarvādvaitadarśinaḥ sarvabhogaṇiḥspr̥hāḥ. ahaṁ eva bhagavān vāsudevaḥ sarvātmā na madvyatiriktaṁ kiṃcid astīti jñātvā tam eva pratyañcam sadā **cintayanto mām** nārāyaṇam ātmatvena **ye janāḥ** sādhanacatuṣṭayasampannāḥ saṃnyāsinaḥ pari sarvato 'navacchinatayā paśyanti te madananyatayā kṛtakṛtyā eveti śeṣaḥ (その者たちにとって、別のもの、すなわち違い (相違、多様性) の知覚の対象が存在しない、そのような者たちが別のものを持たない者たちであり、全てを不二と見る者たちであり、全ての享受を離れた者たちである。私こそが主ヴァースデーヴァであり、全てのものを本質とし、私と異なる如何なるものも存在しない、と他ならぬ内的な彼を知ってから、常に私を、

GAD 715,34-716,1 (on BhG 9.23): nanv anyā api devatās tvam eva, tvadvyatiriktasya vastvantarasyābhāvāt. tathā ca devatāntarabhaktā api tvām eva bhajanta iti na ko 'pi viśeṣaḥ syāt. tena **gatāgataṃ kāmakāmā** vasurudrādityādibhaktā **labhante**. (BhG 9.21) **ananyāś cintayanto mām** (BhG 9.22) tu kṛtakṛtyā iti katham uktam.

【問】他の神格たちも、貴方（クリシュナ）に他ならない。貴方と別に他の実在は存在しないから。また同様に、他の神格のバクタ（bhakta、信愛者、信仰者）たちも貴方だけに仕える。よって、如何なる相違もないに違いない。それ故に、享樂を望む、ヴァス [神群]・ルドラ [神群]・アーディティヤ [神群] などのバクタたちは行ったり来たり [すること] を得る。しかし、ひたすら私を思っている者たちは、為すべきことを為した者となる、とどうして述べられたのか。

この問いの趣旨を簡潔に述べると次のようになろう。全ての実在は最高神クリシュナに他ならないので、ヴァス神群・ルドラ神群・アーディティヤ神群といった他の神格も最高神クリシュナに他ならない。そのため、他の神格のバクタたちも最高神クリシュナのバクタということになる。したがって、他の神格のバクタたちが行ったり来たりする、すなわち輪廻から抜け出せない一方、クリシュナのバクタたちは為すべきことを為した者となる、すなわち解脱することができる、という違いがあるのはどうしてなのか、ということである。

この問いに対して、マドウスーダナは、それは他の神格のバクタたちが、無知の故に正しく最高神クリシュナのことを知らないからであると答える。

GAD 716,1-4 (on BhG 9.23¹⁶): yathā madbhaktā mām eva yajanti tathā

すなわちナーラーヤナを自身だと思いが、その者たち、すなわち四つの達成手段を備えた放棄者たちは、全く完全に限定されないものとして [ナーラーヤナである私を] 見る、そのような者たちは、私と異ならない者として、為すべきことを為した者たちに他ならない、と [語が] 補われる。

ye 'nyadevatānāṃ vasvādīnāṃ bhaktā yajante jyotiṣtomādibhiḥ śrad-
dhayāstikyabuddhyā 'nvitāḥ, te 'pi madbhaktā iva he kaunteya
tattaddevatārūpeṇa sthitaṃ mām eva yajanti pūjayanti. avidhipūrva-
kam avidhir ajñānaṃ tatpūrvakam. sarvātmatvena mām ajñātvā
madbhinnatvena vastvādīn kalpayitvā yajantīty arthaḥ.

私（クリシュナ）のバクタたちが私のみを祀るように、他の神格たち、
すなわちヴァス〔神群〕等のバクタたちは、ジョーティ・シュトーマ〔祭〕
等によって、信頼、すなわち信心をもって祀る、そのような者たちも、
私のバクタたちのように、おお、クンティーの息子よ、それぞれの神格
をあり方として留まっている他ならぬ私を祀る、すなわち供養する。規
定されていないことに基づいて、すなわち規定されていないこととは無
知であり、それに基づいて、ということである。全てのものを本性とす
るものとして私を知らないで、私と異なったものとしてヴァス〔神群〕
等を想定して祀る、という意味である。

ヴァス神群等の他の神格たちを、信頼をもって祀るバクタたちも、実際には
それら他の神格の姿を取っている最高神クリシュナを祀っているのである
が、無知の故に、最高神クリシュナと他の神格たちが同一であることを知ら
ないで、異なった存在と考えて祀っているのである。

2.3. 彼らが輪廻から抜け出せないのは何故か

では、最高神クリシュナと他の神格たちが本来同一であることを知らない
で異なった存在と考えていると、どうして輪廻から抜け出せないのであろう
か。この点に関して、マドウスーダナは次のように述べている。

¹⁶ BhG 9.23: ye 'py anyadevatābhaktā yajante śraddhayānvitāḥ / te 'pi mām eva kaunteya
yajanty avidhipūrvakam // 23 // 〈信頼をもって〔他の神格たちを〕祀る、他の神格のバ
クタたちも、規定されていないことにもとづいて、クンティーの息子よ、他ならぬ私を
祀る〉。

GAD 717,18-21 (on BhG 9.24¹⁷): **ato** matsvarūpāparijñānān mahatāyā-seneṣṭvāpi mayy anarpitakarmāṇas tattaddevalokaṃ dhūmādimārgeṇa gatvā tadbhogānte **cyavanti** pracyavante tadbhogajanakakarmakṣayāt taddehādiviyuktāḥ punar dehagrahaṇāya manuṣyalokaṃ pratyāvartante. ye tu tattaddevatāsu bhagavantam eva sarvāntaryāmiṇaṃ paśyanto yajante te bhagavadarpitakarmāṇas tadvidyāsahitakarmavaśād arcirādimārgeṇa brahmalokaṃ gatvā tatrotpannasamyagdarśanās tadbhogānte mucyanta iti vivekaḥ.

したがって、私（クリシュナ）の本質を認識していないので、大いなる努力によって〔それぞれの神を〕祀ってから、私に対して行為を捧げている者たちは、それぞれの神の世界に煙等という道〔すなわち祖霊へ至る道, pitṛyāṇa〕によって至ってから、そこでの享受が終わる際に墜ちる、すなわち失墜する、そこでの享受を生じさせる業が消失するので、そこでの身体等が引き剥がされ、再び身体を得るために人間界に戻ってくる。一方、それぞれの神格に対して、主（bhagavat）こそが全てのものの内制者であると見ながら祀る者たちは、主に諸行為を捧げ、彼（主）についての明知を伴った業（karma）の力で炎等という道〔すなわち神へ至る道, devayāna〕によってブラフマンの世界（brahmaloka）に至ってから、そこにおいて正しい見解が生じ、そこでの享受の終わりに際して解脱する、という識別がある。

クリシュナの最高神としての本質を認識していないので、他の神々を大いなる努力によって祀りながらも最高神クリシュナに行為を捧げている者たちは、その祭祀行為の結果、祭祀対象であったそれぞれの神々の世界に至り、そこでの享受を生じさせる業が消失すると再び人間界に戻ってくるというの

¹⁷ BhG 9.24: ahaṃ hi sarvayajñānām bhoktā ca prabhur eva ca / na tu mām abhijānanti tattvenātaś cyavanti te //（というのも、私は全ての諸祭祀の享受者であり、支配者であるから。一方、彼らは私を真に知らない。したがって、〔彼らは再び人間の世界に〕墜ちる）。

である。

一方、クリシュナ以外の他の神格たちを祀る者たちであっても、それぞれの神格に対してクリシュナこそが全てのものの内制者であるを見ながら、すなわちそれぞれの神格も真実には最高神クリシュナであるを見ながら、クリシュナへ諸行為を捧げている者たちは、形式上神々に対する諸行為ではあるけれども、クリシュナについての明知を伴うクリシュナへ捧げられた諸行為の結果、ブラフマンの世界に至り、そこで正しい見解が生じ、そこでの享受が終わる際には解脱することができるのである。

ここでは以上のように、輪廻世界に留まる者たちと解脱に達する者たちとの違いが対比的に述べられている。この対比的な記述からすると、最高神クリシュナと他の神格たちが同一であることを知らず異なった存在であると考えている者たちが輪廻から抜け出せないのは、クリシュナへ諸行為を捧げていないからである。クリシュナへ諸行為を捧げていないということは、諸行為の果報を放棄せずそれらの獲得を欲する、ということであり、BhG 9.20 に対する GAD に明示されていた通り、彼らが欲望を持つ者であることを意味している。一方、他の神格たちを祀りながらも、その神格たちが真実にはクリシュナであると見ている者たちは、クリシュナへ諸行為を捧げている、すなわち諸行為の果報を放棄し、その果報を望んでいないので、最終的に解脱へ至るというのである。

以上のことから、「他の神格たちも真実には最高神クリシュナと同一である」という真実の知を持つ者には諸行為の果報に対する欲望がないことが、一方、真実の知がない者には諸行為の果報に対する欲望があることが理解される。では、人々が輪廻から解脱できない要因である、真実の知がないことと欲望があることはどのような関係にあるのであろうか。この点に関しては、以下の記述が参考になる¹⁸。

¹⁸ 本稿第2節第3項のこれ以下の議論は、執筆者が第33回西日本インド学仏教学会学術大会（2023年7月29日、於広島大学）での発表「神へのバクティは何を契機としているのか」において論じたものを一部改変したものである。またこの発表の内容は、同じく「神へのバクティは何を契機としているのか」と題した学術論文として、『南アジア古典

マドゥスーダナは、BhG 7.20¹⁹ に対する GAD において、最高神クリシュナ以外の神格に帰依する者たちがクリシュナを信愛しない理由を以下のように述べている。

GAD 593,28-30 (on BhG 7.20): mohanastambhanākaraṣaṇavaśikaraṇa-māraṇocātānādiviṣayair bhagavatsevayā labdhum aśakyatvenābhima-tais **tais taiḥ** kṣudraiḥ **kāmair** abhilāṣair **hr̥tam** apahr̥taṃ bhagavato vāsudevād vimukhikṛtya tattatphaladātṛtvābhimatakṣudradevatābhi-mukhyaṃ nītaṃ **jñānam** antaḥkaraṇaṃ yeṣāṃ te ...

惑わせること・硬直させること・誘惑すること・征圧すること・殺すこと・根絶すること等を対象とし、主への奉仕によっては獲得し得ないものと認められているそれぞれのつまらない (kṣudra) 欲望、すなわち願望 (abhilāṣa) によって、知、すなわち内的器官 (antaḥkaraṇa, 心) が奪われた、すなわち取り去られた、つまり主ヴァースデーヴァから顔を背けて、それぞれの〔欲望の〕果報の授与者であると認められているつまらない神格 (kṣudradevatā) に顔を向けるように導かれた者たちは……。

ここでの記述によると、クリシュナ以外の神格に帰依する者たちがクリシュナを信愛することがない理由は、つまらない諸の欲望によって内的器官 (心) が奪われているからである。そして、心が奪われた者には、真実の知の妨害があると考えられる。この点に関して以下の GAD の記述を見てみたい。

GAD 606,28-33 (on BhG 7.27): **icchādveṣābhyām** anukūlapratikūlavi-

学』第 19 号 (2024 年 7 月に九州大学文学部インド哲学史研究室から発行予定) に掲載予定である (眞鍋 [2024])。

¹⁹ BhG 7.20: kāmāis tais tair hr̥tajñānāḥ prapadyante 'nyadevatāḥ / taṃ taṃ niyamam āsthāya prakṛtyā niyatāḥ svayā // (それぞれの欲望によって知を奪われた者たちは、それぞれの決まり事に依拠して、自らの本性によって制約されて、他の諸神格に帰依する)。

ṣayābhyāṃ samutthitena śitoṣṇasukhaduḥkhādīdvandvanimittena **mo-**
henāhaṃ sukhya ahaṃ duḥkhītyādiviparyayeṇa **sarvāṇy** api **bhūtāni**
saṃmohaṃ vivekāyogyatvaṃ **sarge** sthūladehotpattau satyāṃ **yānti**. ...
na hīcchādveṣarahitaṃ kiṃcid api bhūtaṃ asti. ... ato rāgadveṣavyākū-
lāntaḥkaraṇatvāt sarvāṇy api bhūtāni mām parameśvaram ātmabhūtaṃ
na jānanti. ato na bhajante bhajānīyam api.

好感 (icchā) と嫌悪 (dveṣa) から、すなわち沿うこと (anukūla) と反
対すること (pratikūla) を対象とするものから生じた、寒暑や楽苦など
という一対のものを契機とする迷いによって、すなわち私は快適である、
私は不快であるなどという錯誤によって、全く全てのものは、創出時に、
すなわち粗大な身体が生起がある時に、迷妄、すなわち識別 [知] との
不適合性に赴く。……というのも、好感と嫌悪を欠いた如何なるものも
存在しないから。……したがって、好悪 (rāgadveṣa) で動揺した内的器
官 (心) を持っているのだから、全く全てのものは、私 (クリシュナ)、すな
わち最高神であり自身であるものを知らない。したがって [全てのもの
は]、仕えられるべきもの (バクティの対象) であったとしても [私を]
信愛しない。

ここでは、好悪によって心が動揺している者たちは、心が動揺しているため
にクリシュナに関する真実を知らないことが述べられている。好悪によって
であるか、諸の欲望によってであるかの違いはあるが、先ほどの BhG 7.20
に対する GAD でも、欲望によって心が奪われた結果、クリシュナに関する
真実を知らず、他のつまらない神格に帰依してしまうということが述べられ
ていると考えられる。そのため、真実の知がないことと欲望があることとの
関係は、欲望があることから真実の知がない状態が生じるという因果関係に
あることが理解される。

以上確認してきたことから、三ヴェーダを知り、祭式行為を遂行すること
で罪惡が浄められてはいるけれども、欲望を持つ者たちが輪廻世界から解脱
できないということが、以下のように記述できる。彼らは、三ヴェーダを知

る者たちであり、ヴェーダに規定されている通りに諸祭祀を遂行する、世間的にはいわば善人であるが、諸祭祀の果報として天界に生まれることを望む、欲望を持った者たちである。そのため、その欲望によって心が奪われることで、諸祭祀における祭祀対象となる神格たちが真実には最高神クリシュナであるという真実を知ることを阻害され、クリシュナに対して諸行為の果報を放棄することで心を浄化させることを望まず、天界へ生まれることを願って他の神格たちを祀るのである。そしてその祭祀行為の果報として天界に生まれ、天界での享受が終われば人間界に再び生まれ、また天界へ生まれることを願って諸祭祀を遂行し……と、絶え間なく輪廻を続けるというのである。このような輪廻世界から解脱するためには、先ず、諸祭祀を含む諸行為の果報を望まずに放棄して心の浄化を行い、最高神クリシュナに関する正しい知を獲得する必要があるのである。

3. ブラフマンの世界に到達しながらも人間界に戻ってくる者たち

3.1. 五火の明知等の念想によってブラフマンの世界に到達した者たちの事例

ところで、前出の BhG 9.24 に対する GAD において、クリシュナ以外の神格を祀る者たちは、煙等の道によってそれぞれ祭祀対象である神の世界に至り、そこでの享受が終わると再び人間界に戻る、と述べられていた。これは、輪廻する者は祖霊に至る道 (pitṛyānamārga) を通じて再び生まれるというウパニシャッド以来の伝統説²⁰ に依ったものであり、祖霊に至る道が述べられている BhG 8.25 においては、輪廻する者が最終的に月に達し、そこで可能な限り果報を享受してから、再び人間界に戻ってくることが説かれている²¹。しかし、BhG 9.24 に対する GAD では、祖霊に至る道によって到達し

²⁰ *Chândogyopaniṣad* 5.10.3-7 と *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* 6.2.16 に見られる祖霊の道 (pitṛyāna) のことである。

²¹ GAD 664,30-665,3 (on BhG 8.25): devayānamārgastutyartham pitṛyānamārgam āha — dhūmo rātris tathā kṛṣṇaḥ śaṇmāsā dakṣiṇāyanam / tatra cāndramasaṃ jyotir yogi

果報を享受する場所が、月ではなく、祭祀対象であるそれぞれの神格の世界とされているところが注目されるべき点であろう。

一方、BhG 9.24 に対する GAD においては、それぞれの神格に対してクリシュナこそが全てのものの内制者であるとながら祀る者たちは、クリシュナに諸行為を捧げて、炎等という道によってブラフマン（ブラフマン神＝ヒラニヤガルバ神²²）の世界に至ってから、そこでの享受の終わりに際して解脱するという、神に至る道（devayānamārga）による漸進解脱（kramamukti）も述べられていた。BhG 9.24 に先行する BhG 第 8 章に対する GAD では、最高神クリシュナに対して念想をすることで、神に至る道によって漸進解脱が可能であることがたびたび説かれており、BhG 9.24 に対する GAD におい

prāpya nivartate // 25 // atrāpi **dhūma** iti dhūmābhimānini devatā. **rātrir** iti rātryabhimānini. **kṛṣṇa** iti kṛṣṇapakṣābhimānini. **śaṇmāsā dakṣiṇāyanam** iti dakṣiṇāyanābhimānini lakṣyate. etad apy anyāsāṃ śrutyuktānām upalakṣaṇam. ... **tatra** tasmin pathi **prayātāś cāndramasaṃ jyotiḥ phalaṃ yogī** karmayogīṣṭāpūrtadattakārī **prāpya** yāvatsampātām uṣitvā **nivartate**. sampataty aneneti sampātāḥ karma（神に至る道を称賛するために、祖霊に至る道を述べる。——煙、夜、[月の]黒[分]、[太陽が]南行する六ヶ月、そこに[逝った]ヨーガ行者は、月の輝きを獲得してから戻ってくる。——ここでも、煙とは、煙を私と思い込んでいる神格が[間接表示されている]。夜とは、夜を私と思い込んでいる[神格が間接表示されている]。[月の]黒[分]とは、[月の]黒分を私と思い込んでいる[神格が間接表示されている]。[太陽が]南行する六ヶ月とは、南行する[六ヶ月を]私と思い込んでいる[神格]が間接表示されている。以上のことも、天啓聖典に説かれている他の[神格たち]を代表している。……そこに、すなわちこの道に逝ったヨーガ行者、すなわち行為のヨーガを行う者であり、憐れみ深い[行い]と[他者の]利益となる[行い]と施与とを為す者は、月の輝き、すなわち果報を獲得してから、すなわち可能な限り[月に]住んでから戻ってくる。これによって起こるという意味で発生という行為である）。

²² 後に提示する BhG 8.23 に対する GAD に示されているように、ここでの「ブラフマン」とはヒラニヤガルバ神のことである。マドゥスーダナの別の著作 *Siddhāntabindu* においては、ブラフマンの世界へ到達することがヒラニヤガルバの世界への到達と述べられている。眞鍋 [2017] 参照。ヴェーダーンタ学派における一般的なヒラニヤガルバ観に関しては Gonda [1991] 参照。また、ヴェーダーンタ学派内にはこの「ブラフマン」を最高のブラフマンであるとする説と結果としてのブラフマンであるとする説との二つの解釈があった。この点については Yoshimizu [2021: 518-520] を参照。マドゥスーダナの解釈は、結果としてのブラフマンであるとする解釈の延長線上にあるが、少し特殊なものである。

て説かれる解脱も、BhG 第 8 章に説かれている念想による漸進解脱と見做すことができる。しかし、BhG 第 8 章においては、念想によってブラフマンの世界に到達しながらも、再び生まれ変わる者についても述べられている。

GAD 645, 7-9 (on BhG 8.16): atreyaṃ vyavasthā. ye kramamuktiphalābhir upāsanābhir brahmalokaṃ prāptās teṣāṃ eva tatrotpannasamyagdarśanānāṃ brahmaṇā saha mokṣaḥ, ye tu pañcāgnividyādibhir atatkratavo 'pi tatra gatās teṣāṃ avaśyambhāvi punarjanma.

ここで、以下の異なった立場の確定 (vyavasthā) がある。漸進解脱を果報とする諸念想によってブラフマンの世界に達した者たち、そこ（ブラフマンの世界）で正しい見解が生じた同じ彼らは、ブラフマン〔神〕とともに解脱する。一方、それ（ブラフマンの世界）を望んでいなく (*atatkratu) とし、五火の明知等によってそこ（ブラフマンの世界）に達した者たち、彼らにとって再び生まれることは必然的である。

また、

GAD 659, 27-29 (on BhG 8.23): devayāne pathi gatās tu yady api kecid āvartante, pratikopāsakās taḍillokaparyantaṃ gatāḥ, hiraṇyagarbhaparyantaṃ amānavapurūṣanītā api pañcāgnividyādyupāsakā atatkratavo bhogaṇte nivartanta eva ...

一方、神に至る道に行った者たちで、ある者たちは戻って来るとしても、すなわち象徴 (pratika) を念想する者たちで稲妻 (taḍit) の世界にまで行った者たち、つまりヒラニヤガルバ〔神〕 (=ブラフマン神) に至るまで人でないプルシャに導かれた者たちであっても、五火の明知等を念想する、それ（ヒラニヤガルバ神 = ブラフマン神の世界）を望まない者たち (*atatkratu) は、享受が終わる時に必ず戻って来るとしても……

以上の記述によれば、ブラフマンの世界への到達を望んでいなくとも、五火

の明知等という念想を遂行することによって、その果報としてブラフマンの世界へ到達した者たちは、その世界での享受の終わりに解脱するのではなく、再び生まれ変わるというのである²³。

ここでは、ブラフマンの世界への到達を望んでいない者たちが、人間界などにおける享受に対する欲望があるのか否か、明言されていないが、ブラフマンの世界への到達を望んでいないということは、解脱も望んでいないと理解できるので、人間界などでの享受に対する何らかの欲望があると理解していいであろう。そのため、三ヴェーダを知り、諸祭祀を遂行する者たちと同様、彼らも五火の明知等の念想というヴェーダの教説を遵守しながらも、輪廻世界に対する何らかの欲望を持っているがためにそこに留まっている者た

²³ シャンカラ (Śaṅkara, ca. 8th CE) は、*Brahmasūtra* 4.3.15 に対する彼の註釈 *Brahmasūtrabhāṣya* において、五火の明知に依拠すると、ブラフマンの世界を望まなくとも、聖典の記述に従ってブラフマンの世界に到達することができることを認めている。その一方で、聖典にブラフマンの世界への到達が明確に記述されていない場合には、念想によってブラフマンの世界に到達するか否かは、それを望むか否かによると述べている。*Brahmasūtrabhāṣya* 503, 2-5: *nanv abrahmakratur api brahma gacchatiti śrūyate, yathā pañcāgnividyaīyām “sa enān brahma gamayati” (Chāndogyopaniṣad 5.10.2) iti bhavatu yatra evam āhatyavāda upalabhyate, tadabhāve tu autsargikeṇa tatkratunyāyena brahmakratūnām eva tatprāptiḥ, na itareṣām iti gamyate* (【反論】ブラフマンを望まない者であっても、ブラフマンに達する、と伝承されている。例えば、五火の明知に関して、「彼は彼らをブラフマンへ導く」と。【答】明瞭な説明が得られる場合にはその通りに違いない。しかし、それ(明瞭な説明)がない場合、一般規則である「それを望む者」という解釈規則によって、ブラフマンを望む者たちのみが、それに到達するのであり、他の者たちが「それに到達するのでは」ない、と理解される)。「それを望む者という解釈規則」(tatkratunyāya)というのは、以下の *Chāndogyopaniṣad* 3.14.1 に見られるシャーンディリヤの教説のうちの一つのことを指している。*Chāndogyopaniṣad* 3.14.1: *atha khalu kratumayaḥ puruṣo yathākratur asmin loke puruṣo bhavati tathetaḥ pretya bhavati, sa kratum kurvita* (また実に、人は望み(意向)から成ものである。人が、この世界において望みを持つ通りに、その通りにこの[世界]を去ってからなる。彼は望みを為すべきである)。マドゥスーダナは、シャンカラのこの主張からさらに進んで、ブラフマンの世界における享受が終わった後に漸進解脱を得るか人間界に戻ってくるかということも、「それを望む者という解釈規則」によるものであると考えているということである。なお、この点に関する理解が眞鍋[2017]では誤っていたため、この場で訂正したい。

ちであると言うことができる。

3.2. ヨーガの実践途中で死んでブラフマンの世界に到達した者たちの事例

さらにマドゥスーダナは、ブラフマンの世界へ到達しながらも再び生まれ変わる者に関して別の事例も論じている。それは、「内的なヨーガ」(adhyātmayoga = pātañjalayoga)²⁴を行いながらも、その完成を経ずして途中で死んでしまった、ヨーガから脱落した(yogabhraṣṭa)ヨーガ行者の事例である。マドゥスーダナは、このヨーガ行者が、五火の明知等という念想を遂行していなくとも、ヨーガの実践によって、五火を知る者と同様にブラフマンの世界へ到達することが可能であることを論じた²⁵後に、ブラフマンの世

²⁴ マドゥスーダナは、「内的なヨーガ」が論じられる BhG 第6章のヨーガを、*Yogasūtra* に依拠しつつ解釈している。その際にも、*Yogasūtra* 自体が最終的にはヴェーダーンタ学派の文脈において語られる。

²⁵ GAD 529, 6-20 (on BhG 6.40): yad uktaṃ yogabhraṣṭaḥ kaṣṭhāṃ gatim gacchaty ajñātasati devayānapitryānamārgānyatarāsaṃbandhitvāt svadharmabhraṣṭavad iti tad ayuktam. etasya devayānamārgasaṃbandhitvena hetor asiddhatvāt. pañcāgnividyaṃ “ya itthaṃ vidur ye cāmy arāṇye śraddhāṃ satyam upāsate te 'rcir abhisambhavanti” (*Bṛhadāraṇyakopaniṣad*, BAU 6.2.15) ity aviśeṣeṇa pañcāgnividāṃ ivātatkratūnāṃ śraddhāsatyavatāṃ mumukṣūṇāṃ api devayānamārgeṇa brahmalokaprāptikathanāt. śravaṇādiparāyaṇasya ca yogabhraṣṭasya “śraddhānvito bhūtvā” (BAU 4.4.23) ity anena śraddhāyāḥ prāptatvāt. “śānto dāntaḥ” (BAU 4.4.23) ity anena cānṛtabhāṣaṇarūpavāgvyāpāranirodharūpasya satyasya labdhatvāt. bahir indriyāṇāṃ ucchṛṅkhalavyāpāranirodho hi damaḥ. yogaśāstre ca “ahiṃsāsatyāsteyabrahmacaryāparigrahā yamāḥ” (*Yogasūtra* 2.30) iti yogāṅgatvenoktatvāt. yadi tu satyaśabdena brahmaivocyate tadāpi na kṣatiḥ. vedāntaśravaṇāder api satyabrahmacintanarūpatvāt. atakratutve 'pi ca pañcāgnividāṃ iva brahmalokaprāptisambhavāt. tathā ca smṛtiḥ “saṃnyāsād brahmaṇaḥ sthānam” iti. tathā prāptaiḥkavedāntavākyavicāraśyāpi kṛcchraśītiphalatulyaphalatvaṃ smaryate, evaṃ ca saṃnyāsaśraddhāsatyabrahmavicāraṇāṃ anyatamasyāpi brahmalokaprāptisādhanaṃtāt samuditanāṃ teṣāṃ tatsādhanaṃ kim citram. ata eva sarvasukṛtarūpatvaṃ yogicāritasya taittirīyā āmananti “tasyaivaṃ viduṣo yajñasya” (*Taittirīyāraṇyaka* 10.64.1) ityādinā. smaryate ca — snātaṃ tena samastatirthasāle sarvāpi dattāvanir yajñānāṃ ca kṛtaṃ sahasraṃ akhilā devāś ca sampūjitāḥ / saṃsārāc ca samuddhṛtāḥ svapitaras trailokyapūjyo 'py asau yasya brahmavicāraṇe kṣaṇam api sthairyam manāḥ prāpnuyāt // *Laghuyogavāsiṣṭha* 6.16.34 // iti (【反対主張】ヨーガカ

界から彼らが人間として生まれることを論じる。

GAD 531,33-532,4 (on BhG 6.41²⁶): yogamārgapravṛttaḥ sarvakarma-saṁnyāsī vedāntāśravaṇādi kurvann antarāle mriyamāṇaḥ kaścit

ら脱落した者は、悪趣に赴く。無知な者である場合、神に至る〔道〕と祖霊に至る道のいずれとも結びつかないから。自身の軌範から脱落した者のように、と述べられたこと、【定説】そのことは理に適っていない。彼は、神に至る道と結びつく者であるので、理由が成立しないから。五火の明知に関して「このように知る者たち、また彼ら荒野において信頼を真実であると念想する者たち、彼らは炎に達する」と、五火を知る者たちと同様に、それ（五火の知識）を実行しないで信頼と真実を持つ解脱を望む者たちも、区別なく、神に至る道によってブラフマンの世界へ到達することが語られているから。また、聴聞等に専念するヨーガから脱落した者は「信頼を持つ者となって」というこのことによって、信頼を獲得した者となるから。また「静穏した、自制した」というこのことによって、非真実を語ることをあり方とする発語作用の抑止をあり方とする真実が獲得されるから。実に、自制とは、外的な諸器官の抑制のない作用を抑止することである。また、ヨーガの教示書においても、「諸禁戒とは、非暴力、真実、不偷盗、禁欲行、無所得である」とヨーガの支分として説かれているから。一方、もしも真実という語によって、ブラフマンこそが述べられているとすれば、その場合でも過失はない。ヴェーダーンタの聴聞等も、真実であるブラフマンの思索をあり方とするから。またそれ（五火の知識）を実行しない者であったとしても、五火を知る者のように、ブラフマンの世界への到達が可能であるから。また同様に聖伝書がある。「放棄からブラフマンの土地〔に達す]」と。同様に、今生において得られたヴェーダーンタ文に対する微細な考察も、80回分の身体的苦行の果報と等しい果報を持つことが伝承されている。また同様に、放棄、信頼、真実であるブラフマンの微細な考察のうちのいずれもブラフマンの世界に到達する手段であるので、それらの集まりがそれ（ブラフマンの世界への到達）の手段であることが、どうしておかしいであろうか。同じ理由から、ヨーガ行者の行状が全ての善行をあり方とすることを、タイッティリーヤ派の者たちは「このように祭祀を知る彼にとって」などと伝承している。また〔以下のように〕伝承されている。——その者の思考器官が、ブラフマンに関する微細な考察に対して瞬間的にでも確立するとすれば、その者は、全ての巡礼地の水で沐浴し、全く全ての大地が〔彼によって〕守護され (dattā), また〔彼によって〕諸祭式が何千回と為され、また全ての神々が〔彼によって〕供養され、また〔彼自身の祖霊たちが〕〔彼によって〕輪廻から掬い上げられ、彼〔自身〕も三界の者達から供養されるべきである。——と)。

²⁶ BhG 6.41: prāpya puṇyagr̥hāṁ lokān uṣitvā śāśvatīḥ samāḥ / śucināṁ śrīmatāṁ gehe yogabhraṣṭo 'bhijāyate // (ヨーガから脱落した者は、福德を為す者たちの諸世界に達してから、〔そこで〕永遠の年数を送り、清浄で輝かしい者たちの家に生まれる)。

pūrvopacitabhogavāsanāprādurbhāvād viṣayebhyaḥ spṛhayati. kaścit tu vairāgyabhāvanādārḍhyān na spṛhayati. tayoh prathamah **prāpya puṇyakṛtām** aśvamedhayājīnām **lokān** arcirādimārgeṇa brahmalokān. ekasminn api bhogabhūmibhedāpekṣayā bahuvacanam. tatra **coṣitvā** vāsam anubhūya **śāśvatīr** brahmaparimāṇenākṣāyāḥ **samāḥ** saṃvatsarān, tadante **śucīnām** śuddhānām **śrīmatām** vibhūtimatām mahārājacakravartinām **gehe** kule bhogavāsanāśoṣasadbhāvād ajātaśatrujanakādivad **yogabhraṣṭo 'bhijāyate**. bhogavāsanāprābalyād brahmalokānte sarvakarmasaṃnyāsāyogyo mahārājo bhavatīty arthaḥ.

ヨーガの道に発動し、全ての行為を放棄した者で、ヴェーダーンタの聴聞等をなしつつも途中で死ぬる者は、以前に蓄積した享受に対する潜勢力 (bhogavāsanā) が発現することで、諸対象を求める。一方、別の者は、離欲の形成力 (vairāgyabhāvanā) が堅固であるので、[諸対象を] 求めない。両者のうち、第一の者は、福德を為す者たちの、すなわち馬供犠祭を行う者たちの諸世界、すなわち炎等の道によってブラフマンの諸世界に達してから [ということである]。単数の意味であっても、享受や階梯の違いに依って、[ブラフマンの諸世界という] 複数形がある。そしてそこで、永遠の、すなわちブラフマンの尺度で費えない年数、すなわち年月を送り、すなわち居住を経験して、それ (ブラフマンの世界での生存) が終わると、清浄で、すなわち清らかで輝かしい者たち、すなわち繁栄した偉大な王である円輪を転じる者たちの家に、すなわち家系に、享受に対する潜勢力の残余があるので、アジャータシャトルやジャンカナなどのように、[その] ヨーガから脱落した者は生まれる。享受に対する潜勢力の力で、ブラフマンの世界 [での享受の] 終わりに全ての行為の放棄に適合せず、偉大な王となる、という意味である。

ヨーガの実践途中で死んだ者は、以前に蓄積した享受に対する潜勢力がある者と、離欲の形成力が堅固な者との二種類の者に分けられる。そのうちの前者、享受に対する潜勢力がある者は、神へ至る道によってブラフマンの世界

に達してから、永遠に近い年数を過ごした後、偉大な転輪王 (mahārājacakravartin) たちの家系、すなわち王族に生まれる。その理由は、享受に対する潜勢力のために、ブラフマンの世界においてもその果報を享受し、その享受の終わりににおいても全ての行為の放棄に適合しなかったためである。

この王族に生まれる者は、ヨーガの実践途中で死んだ者であるため、真実の知の獲得にも至っておらず、また、享受に対する潜勢力が発現するために諸対象を求めると言われていることから、外的な諸対象に対する欲望を持っていると言うことができよう。

ちなみに、一方の后者、離欲の形成力が堅固な者に関して、マドゥスーダナは、彼らは信頼や離欲などという善の属性が優勢であるので、享受に対する潜勢力を欠いているために、ブラフマンの世界に到達してそこで果報を享受することもなく、ブラフマンの明知を持つ貧しいブラーフマナの家系に生まれる、と述べている²⁷。欲望を離れている彼らが生まれ変わるのは、ヨーガの実践途中で死んだ者たちであるので、未だ真実の知を獲得しておらず、そのため解脱に至っていないためであると考えられる。

4. まとめ

以上、GAD においてマドゥスーダナが、ヴェーダの規定に従う、あるいはヴェーダの教説を遂行するという意味で、世間的には善人と見做される者たちが輪廻から脱することができないということをどのように記述しているのか、その輪廻に留まる理由を考察しながら概観してきた。本稿で取り上げた

²⁷ GAD 533, 6-8 (on BhG 6.42): śraddhāvairāgyādikalyāṇaguṇādhipikye tu bhogavāsanāvirahāt puṇyakṛtām lokān aprāpyaiva **yoginām eva** daridrāṇām brāhmaṇānām na tu śrīmatām rājñām **kule bhavati dhīmatām** brahmavidyāvatām, etena **yoginām** iti na karmigrahaṇam (一方、信頼や離欲などという善の属性が優勢である場合、享受に対する潜勢力を欠いているので、福德を為す者たちの諸世界に決して達することなく、知性ある、すなわちブラフマンの明知を持つヨーガ行者たちのみの、すなわち貧しいブラーフマナたちの家系に生まれるのであって、繁栄した王たちの[家系に生まれるのでは]ない。それ故、ヨーガ行者たちの、という[語は]行為者[を意味する]語ではない)。

のは、三ヴェーダを知り、願望祭を遂行する者の事例と、ブラフマンの世界に到達しながらも、その後、漸進解脱を得ることなく輪廻世界に留まる者の事例である。さらに後者に関しては、五火の明知等の念想によってブラフマンの世界に到達した者と、ヨーガの実践途中で死に、ブラフマンの世界に到達した者との二つの事例を取り上げた。

これら三つの事例の何れに関しても、彼らが輪廻から脱することができない根本には、輪廻世界における諸対象の享受に対する欲望がある、ということが指摘できよう。三ヴェーダを知り願望祭を遂行する者たちは天界での果報の享受を望む。また五火の明知等の念想によってブラフマンの世界に達した者たちも、人間界での享受を望むために漸進解脱を望まない。さらにヨーガの実践途中で死んでブラフマンの世界に到達した者たちは、以前に蓄積した享受の潜勢力のためにブラフマンの世界に生まれたのであり、果てはそのために王族の家系に生まれ変わる事となるのである。また、この欲望のために、彼らが真実の知を獲得していないことも共通している。

このように、世間的には善人と見做される者たちも、輪廻世界に対する欲望を持つために真実の知の獲得が妨害され、輪廻世界から脱することができない。そのために、GAD においては離欲と真実の知に対する聴聞・思惟・熟想の繰り返しの必要性が何度も何度も説かれるのである。

(本稿は、JSPS 科研費 21K12843 による研究成果の一部である)

参考文献

一次文献

- BAU *Bṛhadāraṇyakoṇiṣad: The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation.* Patrick Olivelle. New York: Oxford University Press, Inc. 1998.
- BhG *Bhagavadgītā* (Vyāsa): See GAD.
- BSBh *Brahmasūtrabhāṣya* (Śaṅkara): *Brahmasūtra with Śaṅkarabhāṣya.* (Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit Vol. III) Dillī: Motilal Banarsidass 1985 (Repr.: 2007).

- ChU *Chândogyopaniṣad*: See BAU.
- GAD *Gūḍhārthadīpikā* (Madhusūdana Sarasvatī): *Srimad-Bhagavad-Geeta: Containing Eight Commentaries of Keshava Kashmiri Bhattacharya called Tattva-Prakashika, Madhu-Soodan Sarasvati called Goodhartha-Deepika, Shankaranand called Tatparya-Bodhini, Shreedhara Swami called Subodhini, Sadanand called Bhawa-Prakasha, Dhanapati Soori called Bhaṣhyotkarsh-Deepika, Daivadnya Pandit Surya called Paramartha-Prapa, and Raghavendra called Artha-Samgraha* Vol. 1–3. Ed. Shastri Jeevarama Lallurama, Mahadeva Gangadhar Bhakre and Dinker Vishnu Gokhale. Bombay: The Gujarati Printing Press 1912–1915.

二次文献

- Gambhirananda, Swami. trans., 1965. *Brahma-Sūtra-Bhāṣya of Śrī Śaṅkarācārya*. Calcutta: Advaita Ashrama (6th Impr: 1996).
- . trans., 1998. *Bhagavad-Gītā with the annotation Gūḍhārtha-Dīpikā by Madhusūdana Sarasvatī*. Kolkata: Advaita Ashrama (2nd Impr.: 2007).
- Gonda, Jan. 1991. “Hiraṇyagarbha” in *The Functions and Significance of Gold in the Veda*. Eds., by Jan Gonda. (Orientalia Rheno-Traiectina Volume 37) Leiden: E.J. Brill, pp. 216–246.
- Gupta, Sisir Kumar. trans., 1977. *Madhusūdana Sarasvatī on The Bhagavad Gītā: Being an English translation of his Commentary Gūḍhārtha Dīpikā*. Varanasi: Motilal Banarsidass.
- Macdonell, A. A. 1897. *Vedic Mythology*. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- Manabe, Tomohiro. 2024. “The Position of *Bhakti* for the Supreme Deity in the Doctrine of Madhusūdana Sarasvatī”, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 72(3): (36)–(42).
- Olivelle, Patrick. 1998. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*. New York: Oxford University Press, Inc.
- Saha, Niranjan. 2014. *Philosophy of Advaita Vedānta according to Madhusūdana Sarasvatī's Gūḍhārthadīpikā*. London: University of London (Doctoral Thesis, Unpublished). Downloaded from: http://eprints.soas.ac.uk/20350/1/Saha_3653.pdf, on 9th May 2016.
- . 2019. “*Saṅga* and *Nirguṇa-Bhakti*, Advaita Vedānta, And Madhusūdana Sarasvatī,” *Journal of Vaishnava Studies* 28-1: 173–181.
- Thibaut, George. trans., 1962. *Vedānta-Sūtras with the Commentary by Śaṅkarācārya, Part 2*. (The Sacred Books of The East Vol. 38) Delhi: Motilal Banarsidass (Repr: 2000).
- Yoshimizu, Kiyotaka. 2021. “Jaimini, Bādari, and Bādarāyaṇa in the Mīmāṃsāsūtra and the Brahmasūtra,” in *A Road Less Traveled: Felicitation Volume in Honor of John Taber*. Eds., by Vincent Eltschinger, Birgit Kellner, Ethan Mills and Isavelle Ratié. (Wiener

- Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 100) Wien 2021. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, pp. 505-540.
- . 2022. “Prabhākara and Jayanta’s Prābhākara opponent on Vedic enjoiment (niyoga),” *Journal of Indological Studies* 32 & 33: 91-144.
- 金倉圓照. 1984. 『シャンカラの哲学 下 プラフマ・スートラ釈論の全訳』東京, 春秋社.
- 上村勝彦. 1992. 『バガヴァッド・ギーター』東京, 岩波文庫.
- 眞鍋智裕. 2017. 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの漸進解説」 *Waseda Rilas Journal* 5: 271-279.
- . 2024. 「神へのバクティは何を契機とするのか」『南アジア古典学』19: *forthcoming*.
- 湯田豊. 2007. 『プラフマ・スートラ・シャンカラの註釈（下）』東京, 大東出版社.